

(解題) この日の報告は、この文書を読み上げて討論した。引き続き2月研究会でもグレーバーを取りあげているので、それも参照されたい。なお、この日に配布した資料はグレーバー『負債論』からの引用であるが、このサイトにも資料としてつけておく。(榎原)

第一 グレーバーの負債論

はじめに

情況寄稿論文『トランプ登場の背景を論ず』で述べたように、現在のグローバル資本市場(中心的にはニューヨークの株式市場と公社債市場)においては、借りた貨幣を資本として機能させる近代的利子生み資本よりも、それ以前から存在していた消費者金融等の高利資本の債務証券を束ねて証券化した金融商品が、ハイリスク・ハイリターンジャンクボンドとして、公社債市場で売買され、その取引高が国債や社債を凌駕するようになっていた。リーマンショックでこれらジャンクボンドが破綻した時に、その救済策が近代的利子生み資本破綻(株式市場での暴落)の救済策とは異なり、中央銀行による不良債権の買い入れとマイナス金利政策となっている。

マイナス金利とは、資本-利子、労働-労賃、土地-地代、という資本主義の外観の第一の要素である資本-利子の否定であり、ひいては資本主義の否定である。従来資本主義の総本山としての役割を担ってきた中央銀行が、資本主義の否定をし続けないと、今回のジャンクボンドの救済策が継続できないという事態は、そもそも負債とは何かという問題を浮かび上がらせてきた。

負債論については、すでに紹介したラッツァラート『借金人間製造工場』(作品社、原書発行年、2011年)があるが、新しくグレーバー『負債論』(以文社、原書発行年、2011年)が翻訳された。どちらも2008年のリーマンショックに示唆を受け、ジャンクボンドの破綻の意味を負債論という形で解明しようとする労作である。

ラッツァラートは、「負債経済論」の確立を追求しようとしており、またグレーバーも「負債帝国主義論」を提唱している。しかし双方とも、近代的利子生み資本についての理論が欠落していて、それぞれの負債経済論には欠陥がある。今回はグレーバーの説を紹介しながら、その欠陥について補足していこう。

ラッツァラートがドウルーズ・ガタリに依拠してマルクス主義の立場から論じていたのに対して、グレーバーは人類学者であり、それもマルクスにシンパシーをもったアナーキストであるが、人類5000年にわたる負債の歴史的検討をなし遂げたことは素晴らしい業績である。しかし、そもそもの問題意識が、借りた金は返さなければならない、という義務へのイデオロギー批判であり、結論は、借金は返すべきという原理が破廉恥なウソだったことの暴露であった。

「つまるところ負債とはいったいなにか?負債とは約束の倒錯にすぎない。それは数字と暴力によって腐敗してしまった約束なのである。」(『負債論』、578頁)

そしてこの現実をどのように認識できるか、そしてこのことを認識することが、真の自由であるが、それは今のままでは不可能であり、問題は次のように立てられている。

「いかにしてわたしたちは、それを発見することのできる場所にまでたどりつくのか、である。」(578頁)

グレーバーは負債と貨幣を論じながら、物象化や物神性という思考の枠組みをもってはいない。しかし、彼が紡ぎだしている歴史の物語は、いたるところで、物象化と物神性のからくりを描き出している。まず最初にこの問題の指摘から始めよう。

1. 物々交換の神話への批判

第二章、物々交換の神話、でグレーバーはアダム・スミスが貨幣論を物々交換から導き出していることへの批判から始めているが、次のように述べる時に疑問が浮かび上がる。

「ただの義務、すなわち、あるやり方でふるまわねばならないという感覚、あるいはだれかになにかを負っている〔借りがある〕という感覚、それと負債との違いとは、正確に言えば、なんであろうか？答えは単純だ。貨幣である。負債と義務の違いは、負債が厳密に数量化できることである。このことが貨幣を要請するのである。」(『負債論』、34頁)

ここで問題なのは、財の数量化は、例えばその生産時間は貨幣がなくともわかっているということである。古代の貢納性においての貸し借りは、労働時間で数量化できる財の貸し借りではなかったのか。労働の二重性は使用価値を創造する限りでの労働時間と、交換価値という二重の性格を持っていて、使用価値を作る労働時間の計算はまだ貨幣による尺度とは言えない。財が数量化できる、ということは貨幣の価値尺度機能を待たなくてもいいのである。グレーバーはこの論拠にイネスの報告を挙げているが、イネスが目撃したのは、19世紀のヨーロッパの貨幣経済と取引する原始社会の人々であり、その際に貨幣が価値尺度として機能しつつ交換の用具としては信用であったというが、それを貨幣経済のない古代の貸借にまで普遍化することはできないであろう。

ところでグレーバーに先行して、貨幣よりも信用を先行するものとしてケインズやイネスに依拠して主張した楊枝嗣朗『歴史の中の貨幣』(ミネルヴァ書房)の業績があることを指摘しておこう。楊枝も物々交換の神話の批判を試み、貨幣が商品であることへの疑問を提起し、マルクスの貨幣論の批判へと議論を進めている。

2. 原初負債論への批判

次いでグレーバーは、アグリエッタらの「原初負債論」の批判を展開しているが、これは正しい。

アグリエッタ・オレルアン編『貨幣主権論』から彼らの意図を引用しておこう。

「本書の共同研究の基礎をなす仮説は、個人を共同体に帰属させる紐帯を、債務関係——これをわれわれは『生の債務』と呼んだ——としてとらえようとするものである。つまりわれわれは、金融的紐帯が人間諸社会の本質を構成しているということを主張する。・・・金融の後に貨幣が創発されるのであり、貨幣は、生の債務を通じた人間同士の関係の新しい様式である。貨幣は従属化の諸形態を創り出し、かつそれらを修正していく。聖なるものによる人間生活からの収奪は直接的・無媒介になされるが、貨幣はそうした収奪様式に媒介——限定された領有の様式——を対置する。

資本主義の発展は、『生の債務』の諸形態が経済的債務と社会的債務とに二重化されることによって性格づけられる。」(『貨幣主権論』、575～6頁)

納税が金納になったことの重要性

個人主義が支配的になることは認めようとして、

「この時興味深いのは、そのような理論構成の中で貨幣がどんな位置を占めるのかを分析することである。」(577頁)

ジンメル

「経済的行為主体には、実体よりもむしろ関係を、より正確に言えば、社会的全体性に対する関係を把握することが要求される。それというのも、貨幣は、『客観的な集団的統一が人格の動揺を超越する』ことを表しているからだ。この実在を把握可能にする知的道具が象徴である。象徴化は、直接の外観を超えて高みに立つことを可能にし、そのことによって、唯一の意味源泉である個人的な諸形態の理解・表象を可能にする。したがって貨幣経済は知性化の上に成り立っているが、知性化を強いるのは、象徴解読の操作への絶えざる依拠を特徴とする日常生活に他ならない。ここにわれわれは、思考の社会的形態における革命を目撃する。」(579～80頁)

● 大衆の知的文化的水準の向上を、革命と見ていいのか。

「金属貨幣の脱物質化の過程を長々と論じて来たのは、同様の期待によって動機づけられる同様のダイナミクスが、貨幣から政治的負荷を除去しようとする今日の運動にも認められると考えるからだ。自己準拠貨幣は、そのダイナミクスを導く理想とされる。」(580 頁)

「集団の凝縮性の象徴としての貨幣」(581 頁)

MGI 個人主義に徹底して制度を批判することで、象徴の批判にまで進んだ、「脱魔術化」(582 頁)と評価できるか。より宗教的な領域にさまよいだしているのではないのか。

グレーバーの批判

「通貨政策と社会政策を分離しようとするどんな試みも究極的には誤りであるというのが、原初の負債論者たちの核となる主張である。彼らによれば、これらは常に同一のものであった。政府は貨幣創造のために税を使うが、それが可能であるのは、市民全員がおたがいに負っている負債の守り手となるからである。負債こそ社会の本質そのものなのだ。負債は貨幣や市場にはるかに先立って存在しており、貨幣と市場自体はそれをバラバラに切り刻む手段にすぎない。」(84 頁)

「当初この意味の負債は国家ではなく宗教を通じて表現された。」(84 頁)

「ひとは人間本性にみちびかれて『物々交換』にいたるなどということはない。むしろ人間本性がはっきりと示しているのは、人間は貨幣のような象徴をたえず形成してやまないということである。」(87~8 頁)

「税とは端的に、じぶんを形成した社会に対してわたしたちの負う負債の尺度にすぎないというわけである。しかし、このような議論でも、この種の絶対的生の負債がどのようにして貨幣へと換算可能になるのか、はっきり説明されていない。」(89 頁)

● テレらは、古代社会の指導者たちの言明に単純に依拠しているように思われる。

「モラル上の義務が特定の金額へと転化するのはいかにしてか？」(89 頁)

● これがグレーバーの問だ。

「この種の『原始通貨』が物の売買に使用されることはめったになく、使用されたにしても、それが鶏や卵や靴やジャガイモといった日常的な資材の売買であることは決してないからである。それらは事物の入手ではなく、主として人びとのあいだの関係の調整のため、とりわけ結婚の取り決めや、殺人や傷害から生じるいさかいの調整のために使用されるのである。」(90 頁)

アグリエッタらへの批判。負債論者は「人類学の文献を無視しながら古い法典に目をむける傾向にその理由の一端はある。」(91 頁)

「支払いとしての供犠といった観念が決して自明のものではないことがわかる。古代の神学者たちの仕事を詳しく調べてみると、神学者たちの大多数が供犠とは人間が神々と商業的關係をむすぶことのできるひとつの方法であるという考えになじんでいたこと、しかし、それをあきらかにばかげているとも感じとっていったことがわかる。そもそも欲するものすべてを神がすでに手に入れているとするなら、人間はいったいなにを取引すればいいのだろうか？というわけだ。・・・交換とは平等を含意しているものである。したがって宇宙の力と取引することなど最初から端的に不可能であると考えられていたのである。」(94~5 頁)

批判：「神々への負債が国家に領有されそれが税制の基礎となった、という考えもまた吟味に耐えうるものではない。ここで問題なのは、古代世界において、自由市民が税を支払うことは、ふつうはなかったということである。」(95 頁)

古代メソポタミアの都市国家の神殿

有利子負債は、商人への貸付への融資から。メソポタミアは、羊毛と皮革産業。これを売って石や木、金属、金銀をえた。

「まもなく、商業貸付だけでなく、消費貸付も出現する。これは、その後の古典的な意味で微利〔高利〕である。前 2400 年頃にはすでに、地方公務員や大商人が財政難におちいっ

た農民に対して担保を取って貸付を行い、返済できなくなるとその財産を取り上げることが広範な慣行であったようにみえる。」(97頁)

財産には土地、子供や妻や債務者自身。「負債懲役人」

「負債懲役人とは奴隷ではないが奴隷にきわめて接近した存在であり、債権者の家庭、ときには神殿や宮殿で永久に奉仕を強制された。」(98頁)

債務帳消

このような例は原初的負債論者の想像力の外にある。「おそらくこういった研究全体の問題は、最初の仮定、すなわち『社会』なるものに対する無限の負債からはじめるという仮定である。そこでは、神々にむけてひとが投影しているのは社会に対するこの負債であるということになる。そして、つづいて王たちや国民政府によって徴収されるのは、このおなじ負債であるというわけだ。」(99頁)

社会という観念をいつ人がもつようになったか。政府に属しているということ自体明白ではなかった。

3. 古代人の負債論

自己の存在をなにに負っているか。古代人の考えを現代風に示している。

① 宇宙と宇宙の力、つまり自然。＝存在の基盤。「これに対する負債は儀式によって返済される。儀式は小さきわれわれを凌駕する存在すべてへの敬意と承認の行為である。」

② 知識と文化的成果に対して。「それらの人びとに対する負債は、わたしたち自身が学習し人間の知識と文化に貢献することで支払われる。」

③ 祖先に対して。「じぶん自身が祖先となることで返済される。」

④ 人類全体に対して。「異邦人に対する寛容によって、人間的諸関係つまり生を可能なものにする、社会性にかかわる基本的なコミュニズム的土台を維持することによって返済する。」(101～2頁)

「このように整理してみると、議論が前提そのものをむしばみはじめる。これらは商業的負債とはなんの関係もない。」(102頁)

「すでに万物を有しているゆえに神々との取引が不可能であるとすれば、宇宙との取引もまちがいに不可能なのだ。」(102頁)

「人類または宇宙から分離した存在としておのれをみため、こうして一対一の取引を可能であるとする想定自体が、死によってのみ返答の与えられる犯罪なのである。わたしたちの罪責性は、宇宙に対する負債を返済できないことによるものではない。わたしたちの罪責性とは<存在するすべて、またはこれまで存在してきたすべて>と、いかなる意味であれ同等のものであると考えるほどおもしろいあがっているため、そもそもそのような負債を構想できてしまうことにあるのだ。」(102～3頁)

「今日の個人主義的な社会にふさわしいエートスを求めるとするならば、次のようにいえるだろうか。ひとはみな人類、社会、自然または宇宙に対して無限の負債を負っているが、べつのだれかが支払い方法を指示できるわけではない、と。これは少なくとも知的には筋が通っている。もしそうだとすれば、確立された権威のシステムのほとんどすべて——宗教、道徳、政治、経済、刑事司法体制——をそれぞれ異なる欺瞞の方法とみなすことができる。それは計算不可能なものを計算できるといふべき、制約なき負債のうちのあれこれの部分をかきかきしかじかのように返済せよと指令する権限を詐称するにすぎないのだ、と。だとすれば、人間の自由とは、返済方法をどうしたいかをじぶん自身で決定するわたしたちの能力ということになる。

わたしの知るかぎりこれまでこのような発想をした者はいない。実存的負債についての理論は、そのかわり権威の構造を正当化する——あるいは権威の座を主張する——手段に常に墮してきた。」(103頁)

コント、社会への無限の義務、という考えが「社会的負債」という観念に結晶化し、社会運動家に取り入れられた。

「デュルケームにとって宗教とはすべて、わたしたちの相互依存、決してその総体について自覚されることのない無数のやり方でわたしたちに影響している依存を、認識する方法にすぎないのである。『神』と『社会』は、究極的に同一のものなのだ。

これまで数百年にわたって、相互依存によって誰もが負う負債の守護者、個人を個人たらしめている無形の社会的総体の正当な代理人は、必然的に国家でなくてはならないと想定されてきた。これが問題なのである。」(106 頁)

「『原初的負債』という思想のうちに、究極のナショナリズム神話をみてとることさえできる。」(107 頁)

過去：神々への負債を生贄で利子を払う。現在：国家に負っている負債を税で利子を払う、国の防衛には生命で支払う。これは 20 世紀の大いなる罫。

市場の論理と国家の論理の二分法。これがまちがいがい。「国家は市場を創造する。市場は国家を必要とする。どちらもたがいなくしては存続しえないし、少なくとも今日知られているようなかたちでは存続しえないのである。」(107 頁)

- 古代人の負債についての考え方は面白い。現代の負債についての考え方が、すべてを商業的關係に擬して物事を考えていることへのイデオロギー的批判が意図されている。しかし、この種のイデオロギー的批判は果たして有効か、検討の余地あり。

4. ニーチェ批判

貨幣を商品とみるものたちと借用証書とみる者たち 双方である。

「かくして貨幣は、商品と借用証書のあいだをほとんど常にさまよっているのである。」(113 頁)

「いいかえるなら、国家と市場、政府と商人の抗争は、人間の条件にとって本来的なものではないのである。」(113 頁)

- グレーバーは貨幣を商品であり、かつ信用であるという両義性を持つ存在とみている。信用を重視し、商品性を否定する考え（楊枝）はやはりおかしいのだ。

ニーチェ『道徳の系譜学』1887 年公刊

ニーチェからの引用「負い目という感情や個人的な義務という感情はすでに指摘したように、存在するかぎりでも最も古く、最も原初的な人格的關係に根ざすものである。すなわち買い手と売り手の関係、債権者と債務者の関係から生まれてきたものなのだ。・・・値段をつけること、価値を測定すること、同等な価値あるものを考えること、交換すること——これらは人間のごく最初の思考において重要な位置を占めていたものであり、ある意味では思考そのものだったのである。」(114 頁)

ニーチェの思想もブルジョアの思考の枠内だという指摘がある。

イヌイットは、「打算の拒絶、だれがなにをだれに与えたか計算したり記憶することの拒絶に真に人間であることのしるしがあると主張した。」

ニーチェの意義、ニーチェの議論からは宇宙との取引という思考を導く

「人間の条件を考えるために市場の言語を借用したのは、プラーフマナの書き手たちだけではなかった。実のところ、多かれ少なかれ、主要な世界宗教すべてがそうしてきたのである。」(121 頁)

ネヘミヤ記

債務帳消

「メソポタミアにおいてと同様に、聖書においても、『自由』とは、なによりもまず負債の影響からの解放を意味するようになった。」(123 頁)

世界宗教の両義性 「一方で、世界宗教は市場に対する怒号である。ところが他方で、そうした異議を商業的な観点から枠づけてしまう傾向をも世界宗教は有しているのである。」(127 頁)

カースト制や奴隷制への抗議行動は見られないのに、債務者たちの抗議が受け入れられるのか。

「負債をそれ以外のことから峻別しているのは、それが平等の仮定を条件としていることである。」(129 頁)

5. 独特のコミュニズムの定義

「負債がなにかを本当に理解するためには、人間が他者と切り結ぶそれ以外の義務とそれとがどう異なっているか、理解することが必要になる。」(135 頁)

贈与交換に注目するのは一面的

互酬制 互酬性とは「公平、均衡、公正、対称性といった感覚であり、もろもろの尺度の集合体としての正義のイメージのうちに体现されている。」(136 頁)

レヴィ・ストロース 人間生活の言語、親族、経済の三領域の交換システムからなる。

● これに対してモースは社会は単一の原理によるものではなくて複数の原理の絡み合いからなることを主張したようだ。(確かめる必要あり)

思考実験：コミュニズム、ヒエラルキー、交換、という三つの主要なモラルの原理。

コミュニズム

「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて、という原理にもとづいて機能する、あらゆる人間関係」(142 頁)

マルクス主義の用法とは異なる。この単一の原理によって組織された社会はあり得ない。

あらゆる社会システム、資本主義社会も含め、この基盤の上に築かれている。

資本主義のもとでの労働にもこの関係はある。「あらゆる人間の社交性の基盤」(144 頁)

「基盤的コミュニズム」、コモンズ、歓待の法。

コミュニズムを単に所有の問題としてではなく、モラルティの原理として考えること。

交換

「コミュニズムは、これまでみてきた通り、相互的な期待と責任を必然的にふくむという意味をのぞいては、交換にも互酬性にも基礎をおいていない。」(154 頁)

「交換とは等価性にまつわるすべてである。」(154 頁)

「商業的交換の特徴は、その『非人格性』である。」(155 頁)

ヒエラルキー

「真の慈善は、受取人に負債を負わせようなどとはしないということだ。」(164 頁)

「優劣の線がはっきり引かれ、関係を規制する枠組みとしてすべての関係者に受け入れられ、さらに気まぐれな力の行使に悩まされないほど関係が十分に継続しているようなときは、常に関係は習慣と習慣の網の目によって統制されているものとみなされるであろう。」(166 頁)

「ある行為が反復されると、それは習慣となり、その結果、習慣は行為者の本質的性格を決定するようになる。」(168 頁)

様相間の移動

「互酬性とはわたしたちが正義を想像する主要な方法であるという事実」(171 頁)

● 以下に負債の定義的なものがある。

「では、負債とはいったいなにか？」

負債とはきわめて個別具体的な事象である。そして負債は、きわめて具体的な状況から生まれる。それがまず必要とするのは、根本的に異なっている存在とはたがいにみなしていない二人の人間の関係である。少なくとも可能性としては対等であり、本質的な次元において実際に対等であるのだが、現在のところ対等な地位にはない。だが、事態を回復する何らかの方法がある、といった二人の関係である。」(181 頁)

「負債が返済されていないあいだ、ヒエラルキーの論理が支配的になる。互酬性は存在しない。」(182 頁)

「かくして負債とは完遂にいたらぬ交換にすぎないのである。」(183 頁)

「すべての人間の相互作用が交換の諸形式であるということはない。交換の形式をとるものもあるというにすぎないのである。」(183 頁)

6. 人間経済と社会的貨幣

● いったん定義した負債について、市場が登場する前の経済と後の経済の対比をしている。

「しばしばこうした通貨がきわだって重要なものになるのは、社会生活そのものが、そうした物質を獲得し配分することを基軸としてまわっているようなときである。しかし、あきらかにそれらの通貨は、貨幣あるいはまさに経済とは実のところなんなのかについて、〔わたしたちの常識とは〕完全に異なった考え方を表現している。そこでわたしは、それらを『社会的通貨』と呼び、それらを使用する経済を『人間経済』と呼ぶことにした。」(198頁)

「人間経済において人びとが蓄積しているには、どのような負債なのか？どのような種類の貸し借りなのか？そして人間経済が商業経済に席をゆずるとき、あるいは凌駕されるとき、なにが起きるのか？」(199頁)

「起源における『原始貨幣』は、いかなる意味でも借りを返す方法ではなかった。どうやっても支払い不可能である負債の存在を承認する方法だったのである。」(200頁)

「実のところそれは、どのような支払いも不可能なほどかけがえのない価値あるものを要求していることの承認なのだ。女性の贈与に見合う支払いは、ただひとつ、べつの女性の贈与のみである。それまでは、ひとができることといえば、ただ、その未払いの負債を認知することだけなのである。」(201頁)

「ここからおなじみの問題にみちびかれるのは明白である。支払いようのない負債の承認のしるしが、それによって負債が消滅するような支払い形態に転化できるのはいかにしてか？」(208頁)

「村の生活にまつわる大きな事件や悲劇はどれも、たいてい女性をめぐる権利へと帰着することになる。」(213頁)

「あきらかにこれは、資産を最大化することに等しい。つまり、ひとが望んでいたのは、妊娠し、子どもを産むことのできる人間であった。」(214頁)

● 奴隷の定義。最初の商品？

「人間経済においては、なにかを売ることができるようにするには、まずそれを文脈から切り離す必要があるのだ。奴隷とはまさしくこれである。すなわち、奴隷とはじぶんたちを育てあげた共同体から剝奪された人びとのことである。」(222頁)

「大西洋奴隷貿易総体は、巨大な信用協定のネットワークであった。リヴァプールやブリストルを拠点とした船舶所有者たちは、地元の商人たちから有利な条件で融資を受けて物財を入手していた。アンティル諸島やアメリカのプランテーション経営者に奴隷を売却して上がる儲けを見込んでのことである。」(229頁)

「ヨーロッパ人が出現した1500年頃までには、西アフリカの王国や貿易都市の多くで、人質制度の性格はすでに根本的な変化をこうむっていたようだ。それは実質的にある種の負債懲役制度と化していたのである。債務者は、貸し付けを受ける担保として家族の成員をさしだす。」(230頁)

「暴力の全般化した環境が現存する人間経済のすべての制度の体系的な逸脱をみちびいたこと、そのとき人間経済は非人間化と破壊の支配する巨大な装置に転化してしまったということ、これである。」(231頁)

アフリカは例外ではない。(236頁)

「わたしは本書を、ある問いからはじめた。なぜ、人びとのあいだのモラル上の義務が負債と考えられるようになり、その結果、逆にまったくインモラルなおこないを正当化することになったのか？」(240頁)

ヒトの計算可能性、ヒトを存在する文脈から剝奪すること。(241頁)

アフリカの近世の人為的な奴隷制は歴史的過去の自然発生的過程の、意図的な静止画としての意義がある。「人間をその文脈から剝奪し、抽象化することにかけては比類なき能力

を有する奴隷制が、いずれの地においても市場の発生に重要な役割を演じたと考えるに足る根拠があるからである。」(250 頁)

「歴史の大部分を通じて、奴隷たちが支配者に対して蜂起したときでも、奴隷制それ自体に対決することがほとんどなかったことの原因を考えると、」(253 頁)

名誉とは過剰な尊厳（過剰尊厳）である

「奴隷制とは、ある人間固有の文脈から、つまり、人をその人たらしめているあらゆる社会関係から剥奪されるということの究極的な形式である。べつのいい方をすれば、事実上、奴隷は死んでいるのである。」(254 頁)

名誉代価（中世初期のアイランド）

「どの自由人も、じぶんの『名誉代価』つまり尊厳への侮辱に対して支払われるべき価格をもっていた。」(261 頁)

アイランド、すべてが異様なほど克明に記述されている。(263 頁)

「奴隷の価値とは、奴隷から取り上げられた名誉の価値であるからだ。」(264 頁)

「じぶんの家族の女たちを保護する能力は男の名誉の本質的な一部分である。」(265 頁)

「かつては尊厳を測定することに使用されていたおなじ貨幣が卵や散髪に支払うために使用されはじめると、その経済にながら起こるのか？古代メソポタミアや地中海世界の歴史があきらかにするように、その結果は根底的かつ永続的なモラル上の危機であった。」(266 頁)

7. 女性の地位

メソポタミア（家父長制の起源）

名誉という言葉、もともと名誉代価。市場の拡張とともに、一方では価格、他方では市場への軽蔑、という両義性を持つ。(266～7 頁)

危機という語の文字通りの意味は十字路である。(267 頁)

「貨幣と市場の勃興とともにながかき多くの男性たちに性に対する不安をひきおこしたのだろうか？

これはむずかしい問いだが、少なくとも人間経済から商業経済への移行によって、あるモラル上の矛盾がひき起こされたことは想像できる。」(268 頁)

「これからみていくように、まさにこうしたモラル上の危機のなかにこそ、名誉についてのわたしたちが現在抱いている概念の起源のみならず、家父長制それ自体の起源をもみいだすことができる。」(268 頁)

シュメール語の文書、前 3000 年から 2500 年。女性が偏在している。女性の統治者珍しくなかった。つづく数千年のあいだに、変化した。「市民生活における女性の地位が崩壊するのである。徐々に、おなじみの家父長制的なパターンが貞節と結婚前の処女性に力点を置きながら形成され、行政と自由業における女性の役割は弱体化し、やがて消滅した。こうして女性の法的地位は失われ、それによって夫の被後見人と化していったのだ。」(269 頁)

科学や技術の進歩、学習の蓄積、経済成長、要するに人間の進歩、女性にとってはしばしば事態は正反対だったようにみえる。(269 頁)

「これまで強調してきたように、歴史的にみると、戦争と国家と市場はすべてたがいに育み合う傾向にある。征服は徴税につながる。徴税は市場を創設する手段となる。市場は兵士と行政官にとって好都合である。メソポタミアの事例にかぎって言えば、こういったすべてが負債の爆発的上昇と複雑な関係をもち、負債の爆発的上昇はあらゆる人間関係——その延長で女性の身体——を潜在的商品に変容させる脅威をもたらしていた。」(270 頁)

「人類学の一般的な知見では、相対的に人口が少なく、土地がとくに不足しているわけではなく、それゆえに政治がもっぱら労働管理になっている状況においては、『花嫁代償』が一般的になる傾向がある。人口が過剰で土地が不足している場合には、それにかわって『持参財』が広がる傾向にある。つまり女性一人が家族に加わることは食い扶持がひとつ増えることである。」(270 頁)

処女の値段、結婚は女性の入手、財と同じ扱い。(271 頁)

「この展開に奴隷制が一役買っていたのはまちがいない。実際の奴隷が多数存在したことはまれであるのだが、いかなる血縁ももたぬ商品にすぎない人びとの一群の存在することそれ自体が決定的であった。」(271 頁)

「とはいえ、ここで真に決定的な要因は負債であった。」(272 頁)

「メソポタミアの夫も妻を売ることはできなかった。あるいは通常はできなかった。ところが夫が借金に頼ってしまったとき、すべてが一変する。というのも借金となれば、そのために妻子を抵当に入れることは——みてきたように——完全に合法であり、返済できなければ、まさに奴隷や羊や山羊とまったくおなじように、債務の人質である妻子を奪われる可能性があったのだから。このことはまた、名誉と信用が実質的に同一のものになったことを意味する。少なくとも貧しい男にとって、じぶんの信用価値とは、まさにみずからの世帯に対する統率力であった。そして家庭における権威ある関係、すなわち原則として配慮し保護する責任であるような関係が、実際に売買可能であるような所有権となったのである。」(272 頁)

神殿の娼婦たち、重要な存在。

「生殖を目的としない性交、快樂のための性交は神聖なものとなみなされていた。」(274 頁)

「『家父長制』とは、なによりもまず、ある種の純潔の名のもとに大いなる都市文明を拒絶するという身ぶりのうちに起源をもっている。すなわち、官僚、商人、娼婦のふきだまりとみなされていたウルク、ラガシュ、バビロンといった大都市に抗って父による統制の再確立を志すものである。」(275 頁)

「古代中東における抵抗は常に、反乱の政治というより大脱出の政治、つまり共同体や家族とともに——しばしば連れ去られてしまう前に——逃散することの政治である。」(276 頁)

「世界中の聖典——旧約聖書、新約聖書、コーランをはじめ中世から現代にいたるまでの宗教文学など——は、腐敗した都市生活に対する軽蔑と商人に対する疑念、そしてしばしば強烈な女性嫌悪症の合体からなる、この叛逆の声を反響している。」(276 頁)

「わたしたちの知る家父長制は、新興エリートと新興破産者たちのあいだの一進一退の戦いのなかで形成されたものなのである。」(277 頁)

フェミニスト ゲルダ・ラーナー

「国家は、商品化を促進すると同時にその結果を改善するために介入するという複雑な二役を演じていたようだ。つまり負債の放棄と父の権利を強化しながらも、周期的に恩赦を与えろという二役である。だがこの力学はまた、数千年のあいだに、性愛それ自体を、神からの贈与および文明的洗練の具現から不名誉、腐敗、罪業にむすびついたおなじみの連想への、体系的な格下げにみちびいたのである。」(279 頁)

8. 古代ギリシャ、

商品化がシュメールに 3000 年遅れたので資料が多い。

「ホメロスの叙事詩の世界は、交易を軽蔑する英雄的戦士たちの支配する世界である。多くの点で、その世界は中世アイルランドを顕著なまでに彷彿させる。」(281 頁)

「その 200 年後に商業的市場が勃興をはじめると、すべては劇的に変化する。ギリシャの鑄貨は、当初、主要には兵士への支払いのために使用されていたようだ。だが前 600 年ごろになると、ほとんどすべてのギリシャの都市国家は、市民的独立のしるしとして独自の硬貨を鑄造するようになる。とはいえ硬貨が日常取引に一般的に使用されるようになるまで、長くはかからなかった。前 5 世紀には、ギリシャ諸都市における公開討論と共同体の集会の場であるアゴラが、市場の役割も担うようになっていく。」(281 頁)

政治は中東と異なった。

「ほとんどの都市が最終的にみいだした解決策は、近東のそれとは大きく異なるものであった。定期的な恩赦を制度化するかわりに、ギリシャ諸都市は負債懲役制度を制限するか全面廃止する方向にむかい、次いで将来の危機を防ぐため〔領土〕拡張政策をとり、貧者

の子供たちを送り込んで海外に軍事的植民地を確立したのである。またたくまにクリミアからマルセイユまでの沿岸全体にギリシャ人都市が点在するようになり、今度はそれらの都市が活発な奴隷貿易の流通経路としての役割をはたすようになった。奴隷の急増は、転じて、ギリシャ社会の性格を徹底的に変質させた。なによりも、つつましい生活を送る市民さえも都市の政治的・文化的生活に参加できるようになり、真の市民的意識を抱くようになったのである。だがこのことが旧貴族階級をして、新しい民主国家の卑俗性やモラルの荒廃と彼らの眼にはみえたものからみずからを遠ざけるべく、ますます手の込んだ手段を発展させるように駆り立てたのである。

ギリシャが真の幕開けをむかえる前 5 世紀には、だれもが金銭について議論していた。現存するほとんどの文献の執筆者たちは貴族であるが、彼らにとって金銭とは腐敗の化身であった。貴族たちは市場を軽蔑していた。名誉ある男たちの理想は、必要なものすべてをじぶん自身の地所で調達し、現金をいっさい手にしないことだったのだ。」(282 頁)

「いずれの場合も貴族たちは、贈与と気前のよさと名誉の世界をあさましい商業的交換の上位に位置づけたのである。」(282 頁)

ヴェールの着用がギリシャでは普及した。(283 頁)

「かくて貨幣は、名誉の尺度から転じて名誉でないものすべての尺度と化してしまった。男の名誉は金で買えると示唆するようふるまいは、とてつもない侮辱となる。」(284 頁) 貴族たちも貨幣をほしがっていた。「貨幣は欲望の民主化を持ち込んだ」(286 頁)

男性市民の家族を市場の危険と自由から守る努力。コミュニズム的所関係が家庭の内側に限定されるようになった。(287 頁)

英雄時代は、名誉と信用とは等しかった。(291 頁)

「かつてモラル関係の本質であったものが、徐々に、そして微妙なかたちで、あらゆる種類の不誠実な策略の手段に変化してきた。」(291 頁)

「アテナイでは、その帰結は手のつけようのないモラル上の混乱であった、貨幣、負債、金融の言語が、モラルの問題についての強力な——かつ最終的には抵抗しがたい——思考法を提供したのである。人びとは、ヴェーダ時代のインド同様、生を神への負債ととらえ、義務を負債と考え、名誉の負債〔信用借り〕を文字通りに信じ、負債を罪悪、復讐を負債の回収とみなしはじめた。」(294 頁)

正義が存在するとしたら、それは強いものの利益に

「なにごとかの追及は、総じて、究極的には権力、優越性、私的利益の追求であるという発想はいうまでもなく、『権力』や『利益』といった言葉がそれ自体、追及の対象となりうる独自の普遍的現実を指し示しているといった発想を可能にするのは、貨幣の存在のみである。」(296 頁)

「わたしたちが今日、モラル理論と政治理論の中核をなす伝統とみなしているものが、自分の負債を返済するとはいったいなにを意味するのか、という問いに源泉をもっていること、そして、それはどの程度そうなのか、ということである。」(296 頁)

「最終的にプラトンの示唆するのは、冷笑的な現実政治である。」(296 頁)

プラトンは自分を助けてくれた人には言及していない。297 頁

9. 所有論

古代ローマ

ローマ法

所有

「ローマ法において、所有すなわちドミウムとは、人が物に対して持つ絶対的権力によって特徴づけられる『人と物との関係』である。この定義は、はてしのない概念上の問題を引き起こしてきた。まず、生命をもたない物体と人間が『関係』をもつことがどういうことか、はっきりしない。人間どうしは関係をもつことができる。だが、その関係は常に相互的なものだ。では、物と『関係』をもつとは、いったいどういうことか?・・・そこに

ほかにだれもいなければ、所有権についておもしろい悩む必要などないからだ。

すると、所有とは人と物の関係などではないことはあきらかである。それは、物にかんする人びとのあいだの了解あるいは取り決めなのである。」(299 頁)

「しかし、無理からぬことであるが、ひとり人間と地球上のそれ以外の全員のあいだの関係を、それそのものとして把握することは難しい。物との関係として考える方がずっとかんたんなのである。」(299 頁)

● この事態に現象形態と幻影的關係との対比を適応できるか？

「絶対的私的所有という観念は奴隷制に由来している。つまり、所有を人間どうしのあいだの関係ではなく人間と物とのあいだの関係として想像するには、どちらかの一方が物であるような二人の人間どうしの関係を出発点とすればよい。」(301 頁)

「ローマの法学者たちがなによりもまずおこなったのは、家庭内の権威の原理、すなわち人間に対する絶対的権能の原理を取り込み、そういった人間の一部を物として定義し、もともとは奴隷に対して適用されていた論理を、ガチョウや馬車や納屋や宝石箱などなどに、つまり法律が関与するすべてにまで、拡張することであった。」(303 頁)

「しかしながら、ローマの奴隷制による浸透力ある悪影響の最たるものは、ローマ法を通じて、人間の自由についてのわたしたちの観念に大混乱がもたらされたことである。・・・古代世界のどこにおいても、『自由』であることはなによりもまず奴隷ではないということの意味していた。」(306 頁)

「自由とは原理的にみずからの所有物についてなんでも好きなことをする権利であるとする伝統は、まさにこれなのである。実際には、その伝統によれば所有は権利とされるだけにとどまらず、権利それ自身が所有の一形式とみなされるのだが、ある意味でこれは、逆説中の逆説である。」(309 頁)

「賃労働、それは実質的には、奴隷制が自由の売却とみなしうるように、自由の貸与なのである。」(311 頁)

王と奴隷は鏡像。

「ここでようやく、じぶん自身を主人であると同時に奴隷として定義するわたしたちの奇妙な習慣について、みずからの自由の主人としての自己とか、じぶん自身の所有者としての自己とか、そのような概念でもって古代の世界の最も野蛮な側面を複製しているわたしたちの奇妙な習慣について、つまるところいったいなにが問われているのかがみえてくる。これこそが、わたしたち自身を完全に孤立した存在として想像しうる唯一の方法なのである。」(316 頁)

「暴力についてならば、その大部分は視界の外に追いやられた。」(317 頁)

● これがなぜ、どうしてそうなのかの解明が、物象化論だ。

10. 信用と地金

「イノベーションがそこから広がっていた。1000 年以上をかけて、あらゆる地域で国家による硬貨の発行がはじまった。しかし、およそ 600 年頃、つまり奴隷制が消失をはじめた時代に、この動向は突然、逆流しはじめる。現金が干上がってしまったのだ。あらゆる場所で、ふたたび信用システムへの回帰への動きがみられた。

ユーラシア大陸の過去 5000 年の歴史をみると、信用貨幣が支配的な時代と金銀が支配的な時代とが長期にわたって相互に入れ替わる、という事態が観察される——金銀の時代とは、少なくとも取引の大部分が高価な金属片の手から手への引き渡しによっておこなわれた期間のことである。」(322 頁)

「帳消しの対象は、未払の貸付のみならず、あらゆる債務による束縛、手数料あるいは罰金の支払い不能による負債さえもふくまれていて、外されていたのは商業的融資のみであったのである。」(328 頁)

11. 世界宗教の登場の意味

「そこで枢軸時代を前 800 年から後 600 年と定義してみよう。すると枢軸時代は、世界の主要な哲学的潮流すべてのみならず、ゾロアスター教、預言者的ユダヤ教、仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教、儒教、道教、キリスト教、そしてイスラーム教という、今日の主要な宗教すべての誕生を目の当たりにした時代となる。」(337 頁)

12. 資本主義の起源

「したがって、資本はたんなる貨幣ではない。貨幣に転化しうる富ですらない。とはいえ、貨幣を用いてさらに貨幣をつくるべく政治権力を利用することでもない。・・・だが、貨幣は一貫して政治的道具でありつづけた。帝国が崩壊し軍隊が解除されると、装置全体があっけなく雲散霧消したのはそのためである。ところが、新たに擡頭してきた資本主義的秩序のもとでは、貨幣の論理に自律性が与えられた。政治的・軍事的権力は、徐々にその貨幣の論理の周辺に再編成されるようになる。これこそが、国家と軍隊をそもそも背後に抱えていなければ決して存在しえぬ金融の論理だったのだ。」(474 頁)

第二部 信用の世界と利子の世界

信用取引の世界での市場

「市場はこの相互扶助のエートスに矛盾するものとみなされてはいなかったのだ。・・・市場は完全に信頼と信用を通して作動するからである。」(486 頁)

「それゆえ、資本主義の起源の物語は、市場の非人格的力による伝統的共同体の段階的解体の物語ではないのである。それはむしろ、信用の経済がいかんにして利益の経済に転換されたのかという物語であり、非人格的——でしばしば報復的——な国家権力の侵入によってモラルのネットワークが段階的に変容させられていく物語なのだ。」(491 頁)

第三部 非人格的信用貨幣

「貨幣とは社会的習慣であるという観念が決定的にしりぞけられたこの冷酷な唯物論の時代に、近代資本主義の典型的な特徴となった幾多の新しい信用手段や金融的抽象化の形式に加え、紙幣の発生を目の当たりにするのはどういうわけか？これらのうちのほとんど——小切手、債権、株式、年金など——が中世の形而上学の世界に起源を有している。だが、それらが大輪の花を咲かせたのはこの新時代においてだったのだ。

とはいえ、現実の歴史に目をむけてみれば即座にわかるのは、こういった貨幣の新しい諸形態によっても、貨幣は金銀の『内在的』価値に基礎づけられているという前提が覆されることは決してなかったということである。」(498 頁)

「銀行家によって中世国家がうまく統治されていたところでは、政府の財政を操作することは、より安全でより利益を生むことがわかっていた。近代的金融手段の歴史そして紙幣の究極の歴史は、地方債発行とともに始まった。この慣行は、納税市民に強制融資を課し、それぞれに年率 5 パーセントの利子を約束し、『債券』または契約を交渉可能事項とすることで国債による市場を創設したのである。」(499~500 頁)

「16 世紀までに、すでに商人たちは為替手形を利用して負債を決済していたものの、政府の諸々の債券——ラント〔フランスの利付国債〕、フォーロス〔スペインの年金型債券〕アニュイティ〔年金〕——こそが新時代における真の信用貨幣であった。」(500 頁)

「イングランド銀行が創設されたのはロンドンとエディンバラの商人 40 人——その大部分がすでに国王への債権者であった——からなる協会が、対仏戦争を援助するため、国王ウイリアム三世に 120 万ポンドの融資をおこなったときであったこととおもいだそう。その見返りとして銀行券発行を独占する株式会社を許可するよう、彼らは王を説得した。そして、その銀行券は、事実上、王が彼らに負っている額面の約束手形だったのである。これが世界初の独立した国立中央銀行であり、それは小規模の銀行間でやりとりされている負債の手形交換所となった。その手形が、まもなく、ヨーロッパ初の国家紙幣に発展していくのである。」(501~2 頁)

● 銀行券と国家紙幣の違いが不明

13. 資本主義とはなんなのか

第四部 それで、結局、資本主義とはなんなのか？

「ここでわたしたちは奇妙な逆説に直面する。資本主義と関連づけられるようになった金融装置を構成するほとんどすべての要素——中央銀行、債権市場、空売り、証券会社、投機バブル、証券化、年金といった——が、経済学という科学のみならず、工場そして賃労働にさえ先だって出現していたのである。このことはおなじみの見方に対する真の挑戦である。」(509～10頁)

「かつて人びとに身の周りのすべてを潜在的な利潤の源泉としてみることを強制していた非人間的な仕組みだったものが、人間の共同体それ自体の健全性を判断する唯一の客観的な尺度と考えられるようになったのだ。

わたしたちの基盤となる日付である1700年を出発点としてみるならば、近代資本主義の黎明期に現れるのは信用と負債の巨大な金融装置である。」(510頁)

第五部 黙示録

信用制度を人びとが永続すると考えるときに爆発する。

「じぶん自身の永続性の見通しを示されるや、資本主義——あるいは金融資本主義——は、端的に爆発するのである。というのも、資本主義に終わりがないとすれば、信用——つまり未来の貨幣——が永続的に生成されつづけない理由はまったく存在しないからである。最近の出来事がこのことを証拠立てているのは確実である。2008年にいたるまでの期間は、多数の人びとが資本主義は本当に永続するのではないかと考えはじめた時期であった。少なくとも、その代案を想像することは、もはやだれにもできないようにおもわれた。その直接的帰結が、ますますむこうみずになるばかりのバブルの連鎖だったのであり、それが装置全体を崩壊にみちびいたわけである。」(531頁)

14. ニクソンショック

1971年ニクソンショックから説き起こしている。

ドルが金から切り離されたこと(532頁)

金準備がどこに保管されているか。宣伝パンフがあり、見学できる。(536頁)

「この章で試みるのは、第一に、現在のシステムがどのように機能しているかを詳細に分析することよりも、次の点について認識しようというものである。これまで分析してきた長期のパターンは現在どのように作動しているのだろうか、そのパターンはわたしたちの将来について少なくともヒントを与えてくれるだろうか、というのも現代はまちがいなく過渡的な時代だからである。」(537頁)

「その一方で、人類学者としては、このような混乱したシンボルのはたらきはそれ自体において重要であること、さらにそれが表象していると主張する権力の諸形態を維持するうえで主要な役割を担っていること、そう考えざるをえない。これらのシステムが機能するのは、実際のところ、それがどのように行動しているのかだれも知らないがゆえにのことなのだ。」(537頁)

「合衆国は、常にある種の『市場ポピュリズム』に支配されてきたのであり、銀行のもつ『無からカネをつくる』能力——そしてそれ以上に、だれかが『無からカネをつくる』ことを妨害する銀行の能力——は、常に市場ポピュリズムたちの心配の種であった。というのも、市場とは民主主義的平等の単純な表現であるという思想に、それは直接に矛盾するものだったからである。」(537頁)

「すなわち戦争と軍事力の役割である。魔法使いが無から貨幣を創造する奇妙な能力を保持していることには理由がある。その背後には、銃を持った男が控えているのだ。

なるほど、ある意味では銃をもった男はことのはじまりからそこにいた。すでに指摘したように、近代の貨幣は政府債務『国債』に基盤をおいているし、政府が債務を負うのは戦費調達のためである。・・・中央銀行の創設が表現していたのは、戦士の利害と金融業者の利害との結合の恒常的な制度化であり、ルネッサンスのイタリアに端緒をおいている。

それがやがて金融資本主義の基盤になったのである。

ニクソンがドルを変動化させたのも戦費捻出のためであった。」(538 頁)

「ドルを変動化することによってニクソンは、合衆国通貨を純粋な『法定不換紙幣』——合衆国政府がそう主張することによってのみ貨幣として扱われる内在的価値のないただの紙片——へと転換させた。そう多くのひとが考えている。だとすると、いまや合衆国の軍事力のみがその通貨を支えているのだと主張することもまたできよう。ある意味でのこの主張は正しい。しかし『法廷不換紙幣』という観念は、貨幣はもともと金で『あった』ということを前提としている。ところが、本当のところ、わたしたちが目にはしているのは、信用貨幣の新手の変異体なのである。

一般的に信じられていることとは逆に、『好きなときにお札を刷る』ことを合衆国政府はできない。なぜならアメリカの貨幣は、連邦政府によってではなく、連邦準備制度の保護のもとで、民間銀行によって発行されるからである。連邦準備機関は——その名称にもかかわらず——特殊な形態の官民混成体であり、いくつもの民間銀行の共同事業体なのだ。運営委員会こそ議会の承認にもとづいて大統領に任命されるものの、それ以外は自律的に操業されているのである。アメリカで出回っているすべてのドル紙幣は『連邦準備銀行券』である。つまり連邦準備制度がそれを約束手形として発行し、それぞれの紙幣に 4 セントずつ支払って合衆国造幣局に印刷を委託する、というものである。このような仕組みは、もともとイングランド銀行によって開発された図式の一変異体である。つまり、連邦準備制度が財務省長期証券を購入することによって合衆国政府に金銭を『貸付け』、それから政府が負っている（政府の借金である）額面を他の諸銀行に貸し付けることによって、合衆国の負債を貨幣化するのである。」(539 頁)

「たとえば、連邦準備制度は、技術的には、財務省長期証券を買い上げることによって政府に金銭を直接に貸し出すことはできない。だが、だれもが知っているように、間接的にその貸し出しを行うことが第一の存在理由なのである。そして、政府が財務省長期証券を発行するかぎりにおいて、それはある意味で実際に紙幣を印刷することに等しい。」(540 頁) 合衆国の負債は一貫して戦費である。

「合衆国の軍隊は、それ以外のどの軍隊とも異なり、グローバルな権力掌握を指針としつつけている。海外に設置されたおおよそ 800 の軍事基地を通し、地球上のどこへでも強靱な力で介入するべし、なる指針である。」(541 頁)

「実際、まさにこの壮大な／宇宙規模の力こそが、ドルのまわりに組織された世界の貨幣制度を統合しているといってもいいすぎではない。」(541 頁)

象徴的権力

「それが効力をもつには、直接的な脅かしによってでなく、暴力を行使する方途についての桁外れに優位な知識によって規定される政治的環境を創出することによってである。そして、暴力の行使が、ごくつましやかで大部分が象徴的なかたちをとることをやめ、それ以上の強度に上昇するや、この絶対的権力の感覚は崩壊する傾向があるのだ。」(541～2 頁)

「このように、自由に変動するドルの登場から直接にもたらされた諸々の帰結は、資本主義自体がそもそも基礎をおいていた戦士と投資家の同盟との決別ではなく、むしろその究極の神格化とでもいうべき事態を示している。またその仮想貨幣への回帰が、名誉と信頼の諸関係への大いなる回帰にみちびかれることもなかった。現実はその真逆である。だが、わたしたちがいま問題にしているのは、これから何世紀もつづくであろう歴史的時代の端緒である数年なのだ。」(544 頁)

15. クレジット経済

クレジットカード、VISA と MasterCard 1968 年登場、アメリカンエクスプレス もっと後。キャッシュレス経済は、1990 年代になってから。

「これらの新しい信用システムはすべて、人びとの間の信頼関係によってではなく、利潤

追求を旨とする株式会社によって仲介されている。そして合衆国のクレジットカード産業の最初期かつ最大の政治的勝利は、利子を課しうる可能性を秘めた対象に対するすべての法的制限の撤廃であった。

歴史を参照することに意味があるとすれば、仮想通貨の時代とは、戦争、帝国の構築、奴隷制、負債懲役制度からの離脱でなければならず、かつ地球的規模にわたる債務保護の制度の構築にむかわねばならないはずである。ところが、わたしたちはこれまで、それとは反対の事態を経験してきた。新しい世界通貨は古い世界通貨以上に、軍事力にしっかりと根づいている。」(544頁)

IMF「擡頭しつつある強大な官僚制度の頂点に立っているのがまさに IMF である——人類史上初の純粋にグローバルな管理機構であり、国連、世界銀行、世界貿易機構のみならず、それらと提携する、経済同盟、貿易組織、非政府組織などの無数の主体から形成されている——その大部分が合衆国の庇護下で創設されたものである。」(545頁)

「ハドソンが『負債帝国主義』と呼んだニクソンの策略は、すでにはなはだしい制度疲労のもとにある。」(545頁)

反グローバリゼーション運動。東アジアとラテンアメリカでの財政反乱。2002年アルゼンチンの債務不履行、逃げ切り。軍事的冒険の失敗

「合衆国金融産業は、ほぼ好き勝手に通貨を創造する権利を確保するところまでいったにもかかわらず、数兆の支払い義務を累積させ、世界経済をいきづまりにみちびき、全面崩壊寸前にまで達してしまっただけで、そのあと合衆国は、負債帝国主義が安定性を保証すると言いつく張る力さえ失ったのだ。」(546頁)

「他方、アメリカの民間銀行は、市場経済というシステムにそった運営云々のお題目をすべて放りだし、すべての資産を連邦準備制度の金庫に移動することでこの暴落に対処したわけである。」(547頁)

「だが、中国の参加はそこに全く新しい要素を導入したのである。中国の視点にしてみると、まさにこれは、合衆国を伝統的な中国の従属国にしていく長期の過程の第一段階であると考えていることに、それほど無理はない。」(550頁)

「ここまでわたしが述べてきたことはどれも、本書において一貫してきた一つの現実——貨幣には本質はない——を、特に強調してくれるものである。それは『現実には』なものでもない。だから、貨幣の性質なるものは、これまで、そしておそらくこれからも、政治的な係争の問題であるのだ。」(550頁)

「2008年の大暴落についても同様の視点からみることができる。つまり、債権者と債務者、富者と貧者のあいだの長年に渡る政治的な抗争の帰結とみなすことができるのである。実際、ある次元においては、それはまさに見かけどおりのものである。要するに、詐欺、信じがたいほど洗練されたポンジスキームである。しかし、次元を移動してみれば、それは貨幣と信用の定義をめぐる闘争の頂点とみなすこともできるのだ。」(551頁)

16. 新自由主義

19世紀における階級闘争への恐怖が第二次大戦後は、北米の支配階級にとっては失せていた。暗黙のうちでの労使の階級闘争の一時的休戦

労働者の生産性増大が賃金上昇によって報われる(1970年代後半まで)。ケインズ時代、産業民主制。この契約の拡大が進む。

「1970年代のある時点において事態は分岐点にいたった。ひとつのシステムとしての資本主義には、契約を万人に拡大することは不可能であることが端的にあきらかになったのである。」(554頁)

「この帰結については、包摂の危機と呼ぶことができるかもしれない。1970年代の後半には、現存する秩序があきらかに崩壊をはじめ、財政混乱、食料暴動、石油危機、成長の終焉や生態系の危機をめぐる終末論の横行などに同時に悩まされるようになった。やがてあきらかになったように、これらすべてが、それぞれの仕方、民衆に対してこの契約の

果たされぬことを告知していたのである。」(554～5頁)

1978年から2009年までのほぼ30年間、同じパターン。

「生産性と賃金のつながりはばらばらに解体された。生産性の比率は上昇し続けたものの、賃金は停滞するかあるいは低落していった。」(555頁)

マネタリズム、通貨供給量の管理。

「まずこれは、『マネタリズム』への回帰をともなった。つまり、貨幣はもはや金やそれ以外の商品に基礎をおいていないにしても、政府と中央銀行の政策は、まず通貨供給量を慎重に管理することで、あたかもそれが希少な商品であるかのようにふるまうよう保障すべきであるというものである。そのような資本の金融化の意味が、市場に投資される貨幣のほとんどが生産や通商のあらゆる関係から切り離されてしまうこと、そして純粋な投機と化してしまうことであるとしても。」(555頁)

● マネタリズムと金融化との関係。区別がない。

「新しい分配体制においては賃金はもはや上昇せず、そのかわり労働者たちは資本主義の断片を購入するよう奨励されるようになった。金利生活者を安楽死させるかわりに、今や万人が金利生活者になることができるというわけである——実質的には、劇的に高まっていくじぶん自身への搾取率が生み出した利潤のわずかの断片を分けてもらえるということだったのだが。」(555頁)

年金の運用 確定拠出年金

クレジットカード

「このとき多くの人びとにとって、『資本主義の断片を購入すること』ということの意味はこっそり変貌をとげ、ワーキングプアにはおなじみの災厄の種——サラ金や質屋——と見分けのつかなくないものになっていった。」(556頁)

1980年合衆国の金利法の廃止、7～10%を無制限にした。

金融の民主化、日常生活の金融化、という脚色。

「わたしたちはだれもが、投資家と実務執行者のあいだのかねてよりの関係——すなわち、冷徹に計算する銀行家と、借金を負い自尊心のいっさいを捨て名誉なき機械にみずからを貶めた戦士たちの関係——をめぐって組織された小株株式会社として、みずからを認知するようになったのである。」(557頁)

「いいかえると、こうして名誉という原理が市場からほとんど完全に駆逐されたのだ。おそらくその結果、負債という主題全体が宗教的な後光に包まれるようになる。」(557頁)

「いまや万人が負債を抱えているという事実(合衆国の家庭の負債は今や収入の130%平均という推定である)この負債が競馬で一発あてようとしたとかぜいたくしたといった理由でかさんだものでないという事実である。それは、経済学者たちが裁量消費支出と呼んでいる出費のために借りたもの、つまり、主要には子どもに与えられ、友人たちと共有され、あるいはさもなくば他者との関係——要するに単なる物質的計算以外のなにものかを基盤にした関係——を構築したり維持したりするためのものである。いまやひとが単なる物理的生存を超えた生を獲得するためには、負債に依存せねばならないのである。」(560頁)

「わたしたちは、いま、真に特異な歴史的転換期を生きている。信用危機は、前章で提起した原理、すなわち、資本主義はそれが永続するであろうと人びとが信じる世界においては機能することはできないという原理を、生々しく描写している。」(563～4頁)

社会運動の展望を見出せず、抵抗運動が勝つことはないという意識に追い込む執念。

恐怖と愛国主義的順応と、絶望感。

17. 対抗策

「銃器や監視カメラやプロパガンダ機関は、総じてとてつもなく高額で、実際にはなにも生産せず、まちがいなく資本主義システム総体を疲弊させる——そもそも終わりなきバブルの基盤となった、終わりなき資本主義の未来という幻想の生産とともに——要素のひとつでしかない。」(565頁)

「いいかえると、すべてを管理する唯一の方法として資本主義を制度化せねばならないという政治的義務と、投機が統制不能な混乱におちいらぬようその未来の地平を限定せねばならないという資本主義そのものの公認されざる必要性のあいだに、深刻な矛盾があったのだ。そしていったん制御不能の混乱が起こるや、機械全体が内破し、わたしたちは、事態を建て直すそのようなべつの方法をも想像することさえできないという奇妙な状況に取り残されたのだ。わたしたちが想像することのできる唯一のものは、破局である。」(565～6頁)

「じぶん自身を解放するためにわたしたちが最初になすべきこと、それは、ふたたびみずからを歴史的な行為者、世界の出来事の流れに変化をもたらすことのできる民衆とみなすことである。歴史の軍事化が剥奪しようとしているのは、まさにこれなのだから。」(566頁)

「[今回の] 仮想通貨への回帰は、帝国と強大な常備軍からの離脱と債権者による強奪に制約をかける大きな構造の創出にいたりつくだろうか？」(566頁)

「本書でわたしが試みたのは、次代の展望を提示することではなく、わたしたちの視野を開放し、わたしたちの可能性についての感覚を拡大することであった。つまり時代にふさわしい大きな尺度と規模で思考を開始するとはどういうことか、問いかけはじめることである。」(566頁)

モラル的・金融的革新 最初は前 3000 年、有利子負債の発明。ついで、800 年、有利子負債を破棄した最初の洗練された商業システムの発展。現在は三番目の革新。

市場の歴史的回顧 最初の市場、古代メソポタミア、大掛かりな行政システムの副産物で信用によって機能していた。現金市場は戦争によって現れた。租税と貢納制度の下での兵士への報酬支払が硬貨でなされ市場で取引されるようになる。

中世になって初めて、信用システムへの回帰とともに市場ポピュリズムとも呼ぶべきものが現れる。「その思想は、市場が国家を超え、諸国家に対抗し、諸国家の外でこそ存在するというものであった。」(568頁)

人間経済の市場経済への転化。戦争、征服、奴隷制がそれを担った。

市場を人間的自由の最高表現であるという考えにとりついているもの、非人格的で商業的な市場は、歴史的に窃盗に起源をもっている。物々交換の神話は、これへの対抗。

「市場は、ひとたびみずからの暴力的起源から完全に手を切ることができるようになると、きまって別のものへと、たとえば名誉、信頼、相互的紐帯などの織り成すネットワークへと成長していく。」(571頁)

結論

宇宙秩序に負債を負っているという考え、自身の存在基盤と交渉できるという間違った考えに基礎をおいている。逆に世界こそが、あなたから生を借りている。

「わたしにとって、まさにこれこそ(金融の命法)が負債のモラルリティをかくも邪悪にしているものなのである。すなわち、金融の命法が、たえずわたしたちを、好むと好まざるとにかかわらず、たんにカネになるものとしてしか世界をみない略奪者もどきへと還元している、そのやり方である。」(575頁)

「現在の経済秩序がはらんでいる自己破壊衝動を共有しようとしない、新しい経済秩序の先駆者」(576頁)

借金は返すべきというモラルへの批判。この原理が破廉恥なウソだった。

「つまるところ負債とはいったいなにか？負債とは約束の倒錯にすぎない。それは数字と暴力によって腐敗してしまった約束なのである。」(578頁)

真の自由：「いかにしてわたしたちは、それを発見することのできる場所にまでたどりつくのか、である。」(578頁)

第二 負債経済における対抗政策について

1. 負債経済論の構想

1) 負債経済の定義

負債経済とは、グローバル資本市場において、お金にお金を生ませる手段である金融商品の由来が、債務を資本として機能させる近代的利子生み資本とは異なるものによって形成される経済領域を指す。近代的利子生み資本とは異なるものとは、国債があり、また、投資銀行によって消費者金融などの債務の証券化による金融商品が生成されている。これらの金融商品が売買される経済領域を指す。

2) 負債とは何か。

近代資本主義は、他人から借金し、その負債を資本として使用して儲ける機能資本家を生み出した。この借手は従来の借り手である国家や貴族や商人や農民たちと比べてリスクが少なく、貸し手は低利で貸し付けた。近代社会に、根本的に異なる二種類の負債が生まれた。

借りた金で儲ける仕方は古くからあった。古代では海外交易に携わる商人たちがその担い手であり、外国貿易に伴う為替の金融も発達したが、リスクが高く、低利の貸付は実現しなかった。

資本主義のもとでの貨幣資本家による機能資本家への貸付は、機能資本家が借りた貨幣を資本として使用し、剰余価値を生産するが、この剰余価値から機能資本家には利潤が、そして貨幣資本家には利子が支払われる。だから利子の大きさは剰余価値を超えられず、貨幣資本家は高利は取れないがしかし貸付額が巨大となるので、低利での貸付が定着した。

つまり負債には二種類あり、借りた貨幣を資本として機能させる場合と、消費の用途にする場合である。後者はかつては国家の戦費や王侯貴族の浪費、飢饉のときの農民の生計費などであったが、現在では消費者ローンとなっている。

利子生み資本と負債資本、共に外観は貸付けた貨幣に利子がつくというものだが、借りた貨幣がどのように機能しているか、その違いを明らかにするために、借りた貨幣が資本としては機能していない貸付け資本を負債資本と規定しよう。

3) 資本主義の発展段階

耐久消費財と消費者ローンの発展

資本主義の不平等発展

4) 負債資本のヘゲモニー形成過程

2. 政策立案のために

1) 太田講演会趣意書より

- ① 福祉国家への回帰か、民衆の相互扶助の拡大か、ベーシックインカムを導入か
- ② エネルギーの国家管理か、自由化と市場経済による調整か、消費者協同組合を通じた民衆によるコントロールか
- ③ 経済成長か、持続可能な成長か、ゼロ成長か、「縮小社会」の構築か
- ④ 資本のグローバリゼーションに対抗するために国民国家主権の強化を求めるか、民衆の国際連帯を構築するか
- ⑤ 日米安保強化路線に対抗するために、自己武装強化か、国連中心主義か、東アジア共同体建設か、非武装中立か、民衆の国際的自己権力の形成か
- ⑥ 現状の体制の革命か、変革か、抵抗か、改革か

(以下略)